PART－2

# 1か月間、難民キャンプで活動した岡山の看護婦・山田緑さんが綴っていた衝撃日記

# 20キロも続く人糞の山、発酵、そして広がる赤痢の恐怖

この孤児たちに笑顔が戻る日はくるのだろうか。

「もう、いまも夜中にハッとなって飛び起きるんです。難民の子供たちの〝助けて、助けてえ！〟という叫び声が、押し寄せてくるんです」

岡山市の病院（医療法人アスカ会・青波内科）で看護婦として働く山田緑さん（29才）は、興奮した口調で語った。ことし8月9日から1か月間、山田さんは、ルワンダ難民の救援のため、現地で看護婦として活動してきた。

自衛隊の派遣とは別に、ルワンダ難民への医療援助には、日本のさまざまな非政府組織（NGO）が活躍している。その一つ、アジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山市）の一員として、山田さんは、ザイール・ゴマ近郊のキブンバ・キャンプに赴いたのだ。

山田さんは期間中に、キャンプの様子などを日記に書き綴ってきたが、その第1日めは、こんなふうに始まっている。

8月9日　ゴマ市は100万人以上の難民の足跡で踏み固められ、ほとんどの木々が切り倒され、難民の子供たちで溢れていた。

2週間前は、市全体が死体だらけだったと聞き、町全体にゾンビがさまよっているのではないかとゾクッとした。その夜はホテルの丸裸のマットだけのベッドで寝た。半袖ではとても寒く、夜の冷え込みにはびっくりした。

翌日、すでに現地入りしていた日本人の医師と一緒に、ゴマ市近郊にある難民キャンプを見てまわった山田さんは、言葉を失った。難民キャンプには、40万人もの人人がひしめいていた。そして驚いたのは、道路をはさんだ反対側に、20キロにわたって延々と続く黒褐色の低い丘のようなものだった。

「最初、何だろうと思ったら、それは、難民の人たちの排泄物、つまり人糞の山だったんです。トイレなんてないから、その山々が高さ2～3メートルにもなって、何万匹ものハエが群がっていたんです」

8月10日　水も電気もなく朝のコーヒーもない。道行く人たちはボロ服をまとい、木々を切り倒し頭にのせて運んでいる。

あまりの人の多さ、悲惨さに圧倒され「来るんじゃなかった」と、うっすら涙が溢れてきた。夜は食べるものもなし。

## 目の前で子供たちが死んでいく…

山田さんたち（医師2人、看護婦3人、調整員1人）は、現地入りして3日めに、ようやく借家で生活できるようになった。さっそくキャンプ内に、診療所が建てられた。赤十字からテントをもらい、

# ☆ルワンダ現地報告

## この現実をしっかりと見つめてみませんか！

子供たちとの交流に心がなごむ日もあった。（写真／飯田勇）

「国によって命の値段が違うなんて許せません」と語る，山田禄さん。

テントの柱となる木を運び、山田さんの汗を流す日々が始まった。が、5日め、水浴のため風邪をひき、早くもダウンしてしまった。

「風邪というよりも、悲惨な状況に打ちのめされて、精神的な心因反応で寝込んでしまったんです。〝自分のからだのコントロールもできないやつに何ができる〟と、渋谷先生（医師）にいわれ〝くやしい、絶対に負けないぞ〟と、唇を噛みしめました」

そして、その夜、山田さんは恐怖の体験をすることになった。僧家のすぐ近くでザイール兵が発砲をしたのだ。

8月13日　約1時間あまり機関銃のものすごい音で、鳥肌だらけになり、もう少しでオシッコを漏らしてしまいそうだった。

ザイールは赤字国で、もう半年以上も兵士に給与を払えなくなっており、民間人を兵士が脅かしてお金を巻きあげているのだ。

38度近い熱をおして、翌日から山田さんは、医療援助の仕事に立ち向かった。山田さんの仕事は、やってくる難民の氏名や症状を聞き、医師に回すかどうかの判断から薬選びまで幅広い。

そして大変だったのは、穴を掘っただけのトイレを見て回ることだった。というのもこの夏、難民キャンプでは、コレラで1日に1000人もの人が死んだ。いまはどうにか鎮静化したが、かわって猛威をふるっているのが赤痢だという。

「診療所にやってくる難民の8割近くが下痢でして、便の検査をするために、道路の反対側に掘った穴でしてもらうんです。そのたびに私は穴をのぞいて回るんです。もう山のようになっている便をかきわけ、鼻をつまみながらの検査でした。もうほとんどが粘液血便で赤痢でした」

山田さん自身、予防注射を受けてはいたが、赤痢にかからなかったのが、不思議だったという。赤痢のほかに怖いのはマラリア、疥せん（疥せん虫の寄生による伝染性の皮ふ病）、そして肺炎と髄膜炎だった。

診療所が開設され1週間ほどがたつと、1日の患者が300人を超えるようになった。

「でも、薬も注射も食糧も不足しているでしょう。目の前で死んでいく子供たちを見て、どうにもできない自分に腹がたち、イライラはつのるばかりでした」

8月27日　本格的な雨季になりつつあることも災いし、肺炎の患者が増える。夜、帰ってミーティングをする。いくら抗生物質を投与しても、この寒さと低栄養ではどうしようもない……、と、話はそこに行きつく。

赤十字が毛布、ビスケットの配布を始めた。だが絶対数が不足しているため、思うように届かない。今夜も雨が降り続き寒い。きっと今夜も、〝神のお告げ〟を受ける人が増えているだろう。

## 難民の女性の出産に感動！涙！

毎朝5時半に起き朝食や昼食をつくり、バケツ1杯の水でからだを洗い、洗髪をすることにも慣れた。ないないづくしの医療活動はもどかしくてやりきれなくなることもあったが、胸が熱くなる日もあった。

8月28日　難民の女性が駆け込んできた。すぐにも赤ちゃんが生まれる状態だ。何もないここAMDAの診療所でお産が始まった。

現地でザイール人の看護婦さんを4人雇ったが、私は彼女たちの手ぎわのよさに目を奪われるだけだった。待つこと1時間、〝オギャー〜〟という産声。ついにベビーが誕生した。ザイールの看護婦さんのひとりが、へその緒を切る手順の早さ。私は

# 国によって命の値段が違う"…と思えて胸が押しつぶされそうになった——

ルワンダでの貴重な体験を糧に，山田さんはお年寄りの看護に励む。

胎盤摘出をする手がふるえた。

## 新しい生命の喜び…、涙がとまらなかった。

この日、診療所中がわいた。現地スタッフのひとりが、

「この子をAMDA（アムダ）って名づけよう」

といった。感動の涙の中で、山田さんは、しみじみとキャンプに来てよかったと思った。

人々がひしめく難民キャンプでは、刻一刻、生と死は表裏に繰り返される。どうすることもできない現実であった。

**9月1日**　この日は、とてもせつない日だった。朝一番に担ぎこまれた女性がいたが、妊娠5か月から出血がじわじわ続いていた。

昨夜より多量の出血があり、看護士のジョンが血管注射をし血圧昇化剤を打ち、医師を呼んだ。すでに浅い呼吸…、私たちが見守る中、彼女は息を引きとった。

ザイールの看護婦さんが、エプロンで亡骸（なきがら）を包んであげた。

"苦しかったでしょう"と、そのやさしい声が診療所に響いた。

その夜、山田さんは、なかなか眠れなかった。流産で亡くなった女性の顔が、胸に焼きついていた。

「私はまだ結婚していないから、彼女の本当の悲しみやつらさはわからないけど、おなじ女性として、とても衝撃的でした。

看護婦としてこれまでたくさんの人たちとの別れの場面を経験したけれど、なんだか初めて患者さんを亡くした日のような気がして…。そして、こう思ったんです。

"国によって命の値段が違う"と。そのことが、ひしひしと胸に迫って、胸が押しつぶされそうになったんです」

1か月の任務を終えた山田さんは、9月4日、キブンバ・キャンプに別れを告げた。ナイロビ空港から飛び立つとき、山田さんのこころは複雑だった。

「たった1か月で、私には何ができたのか。本当はもっとキャンプに残っているべきだった…。もう一度、戻りたい。人間として看護婦として、そう後悔しました」

いま、山田さんは、病院に併設されている老人ホームで、お年寄りの世話をすることもある。仕事の合間、ふと、ルワンダ難民のことが胸をよぎる。

「短い期間だったけど、何もない極限状態でも、やろうという気持ちになれば、人間、何かをやれるんだということを知ることができました。

そのことを無駄にしないで、毎日の仕事に励まなくちゃと」

山田さんは、自分にいい聞かせるように語気を強くした。

**募金のお願い**
**みなさんのご支援を難民キャンプの医療活動に役立てます。**
郵便振替　01250・2・40709　アジア医師連絡協議会